ひとつぶ
ノベラ
#27
らのけん!
著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

「んふ〜、華ちゃんの髪はいつ触ってもふっわふわだねぇ〜気持ち良いわ〜」
「ちょ、ちょっと黒田さん、やめて下さい！　そんなに近づかないで……あっ……」
「どぉれ、ここの成長具合はどうかな〜？」
「ちょ、ちょっとどこ触ってるんですか……!!」
「なるほどなるほど、相変わらずふにふにでいい感じだねえ〜……じゃあ、こっちはどうかな〜？」
「ひゃん!?　そ、そこは本当にだめです……から……！」
白井華子は迫り来るセクハラ魔――三郷学園高校2年・黒田美玖――の手から逃れるべく、必死の抵抗を試みた。しかし美玖の拘束からはまったく逃れることができない。
それもそのはず、身長148センチの小さな華子に対して、美玖は178センチの長身を誇っている。体格差がそのまま力の差となって、華子を押さえつけている格好だ。
「い、いい加減にしないと、本当に怒りますよ、黒田さん！」
「いいわよぉ、華ちゃん、怒ってぇ〜もっと怒ってぇ〜怒った華ちゃんも超可愛いから〜〜〜〜むふ〜〜くんかくんかくんか」
「ふえええええ、誰か助けてくださーい!!」
黒田美玖絶好調。
いつもの2割増しでセクハラしております。

「ねえ、青たん、華ちゃん助けてくださいって言ってるよ？　……そろそろ止める？」
「バカ言うな緑川、こんな絶好の百合百合シチュ止めたらバチがあたるぜ。見ろよ、華ちゃんのあの幼いながらも淫靡で蠱惑的な表情……。あのギャップが猛烈に俺の創作意欲を刺激しやがるんだぜ！　俺、今なら千ページだって百合ラノベを書ける気がする!!」
ライトノベル研究部の部室のテーブルから、ソファの華子と美玖をかぶりつきで見ていた男子生徒――青山一斗――は、隣の女子生徒――緑川萌――を見もせずにそう応える。
「そだね……。あたしも助けに行ってあのセクハラに巻き込まれるやだし……」
「賢明な判断だ。さあ一緒に百合百合ショーを満喫しよう！」

◆

「よっしゃ、華たん成分補充完了〜！　あ〜今回は心ゆくまで堪能したわ〜天国だわ〜」
「はあはあはあ……まるで地獄のような時間でした……」
筆舌に尽くしがたいセクハラの洗礼を受けてから、華子はようやく美玖の魔の手から解放された。
ソファには「やりきったぜ」という満足感いっぱいの美玖と、涙目でぐったりする華子の姿があった。

「どうして……」
やがて華子は呟きながら顔をあげた。
次いで絶叫する。
「どうしてみんな先生の言うことをちゃんと聞いてくれないんですかぁ～～～!!」
そう、白井華子（25歳）はこの学校の教師であり、かつラノ研の顧問でもあるのだ。
確かに148センチの低身長と、その超童顔っぷりからはまったく教師オーラが感じられない。
だが華子は正真正銘、三郷学園高校の教師なのだ。
まあ、どちらかというとこの学園の隣にある三郷学園中学の生徒だと言われた方が、まだ納得できる気もするが……。さらにいうとそのまた隣にある三郷学園小学校の6年生だと言われたほうがさらに納得できる気もするが……。
それでも華子はれっきとした高校教師なのである。
「だって、華たん可愛いんだも～ん」
「ひっ……」
また頬を擦り寄せてきた美玖から、華子は猛ダッシュで避難する。
「く、くくく黒田さん！　これ以上やったら本当に大変ですからね！　職員会議ものですからね！」
「あっはっはっはぁ～、冗談だって～。もう今日の分の華ちゃん成分はしっかり補充したから

明日までは大丈夫だよ～」
「あれだけやっておいて……今日の分……だと……?」
華子の顔に絶望と諦念の色が浮かぶ。
しかし彼女は負けなかった。
「みんな！　もっとちゃんと原稿書きましょう！　今度の文化祭にはみんなの短編をまとめたアンソロジーを出品するんでしょう!?　もうあと1ヶ月しか時間ないんだよ～!?」
華子は顧問らしく、声を張り上げて必死に部員たちに訴える。
「ん～～～～頑張ってはいるんだけどさあ、なんか進まないんだよね～。キャラが動かないって言うかさ～」
青山は口にくわえた鉛筆をピコピコ動かしながらやる気なさそうにそう応じた。
「あたしもさ～、推理物だからさ～、いい感じのトリックが浮かばなくってさ～、今、止まってるのよね～」
美玖はテーブルに頬杖をつきながら、テーブルの上の煎餅をばりばりと食べている。
「そんな事言ってちゃダメ！　まず書くの！　見る前に飛ぶの！　そうすれば自分に何が足りないか判るし、その後の対策も立てられるのよ！　100本の未完成作より1本の完成作！　ほら、赤城さんをご覧なさい！」
華子は部室の隅を指さした。

そこには黙々と原稿用紙に向かうメガネ女子の姿があった。
そのペン先から凄まじい勢いで文章が紡がれている。
実際、彼女の横にはもう広辞苑10冊分ぐらいの原稿用紙が積みあがっていた。
「赤城さんはもうこんなに書いてるのよ！　すごいと思わない⁉」
「華ちゃん先生～、赤城は1ページも、いや1行だって原稿書いてないぜ」
「え？」
「それ、全部設定」
青山にそう言われて、華子は手近な原稿用紙をじっと見つめた。
膨大な設定集がそこにはあった。
赤城操が考えたエクスタリカという世界の成り立ち、歴史、世界情勢、民族、生活習慣等々が、微に入り細を穿つレベルでびっしりと書き連ねられている。
これが広辞苑10冊分……。
華子は軽い目眩を覚えた。
「心配は要りません、先生。私がエクスタリカを完全に構築し終わったとき、物語はそこから湧き出る泉のようにとめどなく溢れ出すのですから」
メガネ女子が原稿から目を逸らすことなく、淡々と華子に告げる。
その言葉に華子は少しだけ元気を取り戻した。

「そう、そうよね！　そのための設定だもんね！　……参考までに聞かせてもらいたいんだけど、その世界の構築はいつ頃終わりそうかしら？」
赤城はしばし熟考してから3本の指を立てた。
「3日？　まあ、それなら十分文化祭には間に合うわね！」
「3年……」
「はい？」
「3年後には完成します！」
ぐらり。
あまりの衝撃に、華子の世界の天地が入れ替わった。
平衡感覚を失った華子はそのまま床にへたりこんでしまう。
3年……？　そんなに時間をかけていたら、もうみんな学校卒業しちゃうじゃない……。それじゃダメじゃない……。
「まあまあ、華ちゃん、元気だしなよー。ほら、チョコあげる★」
「はむっ⁉」
美玖がテーブルに置いてあったお菓子てんこ盛りの皿からチョコを一粒つまむと、それをそのまま華子の口に放り込む。
「華ちゃんあれだよ、糖分が足りないからそーやってイライラしちゃうんだよ～。そんなこと

じゃ可愛い顔が台無し……あれ？」
華子の動きがぴたりと止まった。
そして何やら雰囲気がおかしい。
「……ひゃっく……」
「華ちゃん、どしたの？」
美玖の呼びかけにも華子はまったく応えない。
やがて。
「書くんだよ……」
華子が幽鬼のようにゆらりと床から立ち上がった。
そしてバンッとテーブルを勢いよく叩く。
「うだうだ言ってねえで、書きゃいいんだよ、このクソガキどもが～～!!」
突然の華子の怒声に黒田、青山、緑川の3人は呆気にとられた。ちなみに赤城は黙々と設定の執筆を続けている。
華子の目は完全にすわっていて、しかも怪しい燐光を放っていた。
もう完全に別人だ。
「キャラが動かない～？　はっ、どこの大御所の先生様だよ、お前は。そんな台詞吐くなんざあ百万年早いってんだべらぼうめ！」

「華ちゃん!?　え？　え？　あれ？」
突然胸ぐらをつかまれた青山が盛大に狼狽える。
「あっ……」
「どしたの？　黒たん？」
「これ、チョコかと思ったらウイスキーボンボンだった……てへっ★」
萌の問いかけに美玖はてへぺろしながらそう応えた。
「え？　じゃあ、華ちゃん、今酔っぱらってるの？」
「『華ちゃん』じゃねえ～！　『白井先生』だろうがあ～！　このクソがぁ～！」
「うわあ～!?」
青山が豪快に投げ飛ばされた。見事な一本背負いだった。
「きゅう～……」
壁に大激突した青山はそのまま気を失ってしまう。
「お前もお前だ、赤城ぃ～！　設定に3年てどんだけ超大作なんだよ！　だいたいそういう設定厨のやつは設定作り終わったら満足して、話なんか書けねえんだよ！　書けてもキャラが設定に合わせてご都合で動くから面白くもなんともねえんだよ！　読者が読みたいのは物語なんだよ！　キャラなんだよ！　誰もお前の頭の中の年表なんか読みたくねえんだよーごるあああ!!」

「あっ……」
華子は勢いよく操の原稿の束（＝設定の束）を横薙ぎにする。
広辞苑10冊分の原稿用紙が盛大に部室を舞う。全員の視界が真っ白に染まっていく。
「あわわわ……」
あまりの事態の急変に、美玖はそろそろと壁伝いに逃げようとした。
「く～ろ～だ～み～く～……」
地獄の釜の底から聞こえるようなおどろおどろしい声が華子の口から発せられる。
「はいっ、華ちゃ……じゃなかった白井先生！」
美玖は直立不動の姿勢で元気よく返事をする。
「お～ま～え～は～な～……」
華子がゆっくりと美玖に近づいてくる。
あまりに濃密な怒りのオーラに気圧されて、美玖はその場からまったく動けなくなった。
「お前はトリックとかなんとか言う以前に日本語がおかしいんだよ！『てにをは』がなってねえんだよ！　意味不明の過剰な装飾語が多すぎんだよ！　誰がどこで何をしてるか、原稿読んでもぜんっぜんわかんねえんだよー！　キャラ描写できないくせにキャラ多すぎなんだよー！」
「は、はい！」

「もっかい小学校の国語からやり直してこいや～！」
「は、はい！　うわわわわ!?」
華子が美玖の胸ぐらをつかんでぶんぶん揺する。
まるで美玖の身体が風に舞う吹き流しのようだ。いったいこの小さな体のどこからこの怪力が出てくるのだろうか。
「あとさっきはよくもセクハラし放題をやってくれたな、この小娘が！『大人の女』をなめんじゃねーですよ！　あたしがこれから本当の『大人のセクハラ』ってやつを見せたらあああ！　覚悟しろごるあああああ！」
「きゃあああああ!?」
言うが早いか、美玖はものすごい勢いでソファに押し倒される。その上にもはや野獣と化した華子が馬乗りになり……。
※主に18禁的な意味で中略※
「ふん、今日はこのぐらいで勘弁しといたらあ」
「……まるで……地獄のような……時間だったわ……」
美玖はそう呟くとそのまま意識を失った。

びりびりに破かれた制服が、華子のセクハラの凄まじさをありありと物語っている。
「緑川……」
「ひっ!?」
本棚の後ろに隠れていた萌が次は自分の番かと身を縮こまらせる。
(神様助けてー！　早く華ちゃんを正気に戻してー！)
萌は必死にそう祈った。
しかし予想に反して華子がその場から動く気配はない。
やがて。
「うわあああああああんー」
華子は盛大に泣き出した。
その姿はまるでデパートで迷子になった小学生女子を思わせた。
「どうして？　どうしてなの？　あたしは、あたしは、みんなにラノベの楽しさを伝えたいだけなのに……物語を書く面白さを伝えたいだけなのにー……うわあああああんー、こんな簡単なこともできないなんて、あたし教師失格だよー人間失格だよー生まれてごめんなさいだよーうわあああああんー」
華子は床にぺたりと座り込み、天を仰ぎならぼろぼろと涙を零す。
——恐るべき怒り上戸からの泣き上戸コンボである。

「華ちゃん……？」
萌は恐る恐る本棚の陰から華子の方に歩み寄る。
「ねえ、緑川さん、あたしの何がいけないから皆に伝わらないの？　あたしがいつもダイエットに失敗するから？　太陽見るとくしゃみが出ちゃうから？　歯磨き粉のチューブをハサミで切って歯ブラシ突っ込んで最後まで使っちゃうから？　シャンプーも最後は水を入れて使い切っちゃうから？　ねー、教えて、教えてよーうわあああああん」
言っていることが支離滅裂になってきた。
華子はいつの間にか萌に抱きしめられて、その胸の中で泣き続ける。
傍目にはまるっきり泣きじゃくる妹をなだめるお姉さんの図だ。
「ぐすんぐすん……くー……」
やがて華子はスイッチが切れたかのようにそのまま眠ってしまった。
荒れ果てた部室に束の間の静寂が戻る。
「華ちゃん、やっぱり可愛い……★」
萌は自分の腕の中で眠る華子のやすらかな寝顔をいつまでも見つめていた。

◆

「……あれ？　あたし寝ちゃってた？」
華子は目をこすりながら、ソファから半身を起こした。
その拍子に萌がかけてくれた毛布がふわりと床に落ちる。
「……みんな！」
華子はぱっと顔を輝かせた。
なぜなら、華子の目の前には黙々と執筆に励むラノ研部員たちがいたからだ。
みんなわき目も振らず原稿用紙に向かって猛烈な勢いでペンを動かしている。
「みんな……みんな、やっと判ってくれたのね⁉」
華子は喜び勇んで青山の許に駆け寄った。
「は、はい！　書いてます！　書いてますよ！　キャ、キャラ動きまくりですよ！　動きすぎて逆に困るぐらいですよ！　あは、あはははは……」
青山は震える声でそう応えた。
恐怖と緊張のため、顔が土気色になっている。
「そう、良かったわ！　その調子で頑張ってね！　あら、黒田さんも好調のようね！」
しかし華子はそれに気がつく様子もなく、次いで美玖の傍に駆け寄った。
「頑張ってます……小学校の国語から……頑張ってます……頑張ってますから……だから……もう、許してください……襲わないでください……」

ジャージ姿の美玖は遠い目で譫言のようにそう繰り返しながら、ジャポニカ学習帳に小学生レベルの漢字の書き取りを続けていた。
「うんうん、基本が大事だからね！　いいことよ～！」
華子はもう嬉しさいっぱいという様子でスキップしながら部室を飛び回る。
「エクスタリカ……あたしの世界……もうどこにも存在しない……」
部室の隅で陰々滅々とする操の姿にはどうやら気がついていないようだ。
そんな華子の姿を微笑ましく見守っているのは萌だけだった。
「これなら文化祭までにみんな立派な作品ができそうだね！　先生、今から楽しみだわ～★」
ニコニコしながら華子は椅子に座って、何気なくお菓子のお皿に手を伸ばす。
その先にはさきの大惨事の元凶となった「ウイスキーボンボン」様が鎮座していた。
部員全員の顔色が瞬時に変わり、異口同音に絶叫する。
「「「華ちゃん、それ食べちゃだめ～～～!!」」」
「ふえ？」
華子はすでにウイスキーボンボンをはむはむしながらきょとんとした顔をしていた。
三郷学園高校ライトノベル研究部は今日も平和である。

おしまい